

# 高校におけるヤングケアラーの割合とケアの状況

—大阪府下の公立高校の生徒を対象とした質問紙調査の結果より—

ハマシマ ヨシエ ミヤカワ マサミツ  
濱島 淑恵\*1 宮川 雅充\*2

**目的** 日本におけるヤングケアラーの実態把握は、諸外国と比較して、遅れているのが現状である。本研究では、高校におけるヤングケアラーの実態を、高校生自身の主訴、認識に基づいて把握することを目的とした。

**方法** 2016年1～12月に、大阪府下の公立高校において、生徒を対象とした質問紙調査を実施した。

**結果** 10校の協力を得ることができ、合計で5,671票の調査票が回収された。そのうち、本研究の分析対象は、5,246票となった。別居している家族も含め、家族にケアを必要としている人がいるかを尋ねた結果、5,246名のうち664名(12.7%)がいると回答していた。さらに、325名(6.2%)が、回答者自身がケアをしていると回答していた。なお、そのうち、53名は、幼いきょうだいがいるためという理由のみでケアをしていた。325名から、この53名を除外した結果、272名がヤングケアラーと考えられ、その割合は5.2%であった。ケアの内容に関する回答結果からは、高校生のヤングケアラーは、ケアを要する家族に、直接、身体的なケアを行っている場合もあるが、家事を担う、年下のきょうだいの世話をする、感情面でのサポートをする、特定の場面で力仕事や外出時の介助・付き添いをするといったケア役割が回ってきやすいことが示唆された。また、ケアの期間については、中央値が3年0カ月、75パーセントイルが6年5カ月であり、ケア役割が常態化、長期化しつつあるケースが一定数存在することが示唆された。ケアの頻度、1日のケア時間に注目して、負担がより大きいと考えられるヤングケアラーの割合を求めた結果、週4、5日以上ケアをしている者は2.3%、学校がある日に1日2時間以上のケアをしている者は1.2%、学校がない日に1日4時間以上のケアをしている者は1.2%、学校がある日に1日2時間以上、かつ、学校がない日に1日4時間以上のケアをしている者は1.0%存在すると考えられた。

**結論** 日本の高校においても、ヤングケアラーは存在し、負担が大きいと考えられるケースもそこには含まれていることが示された。また、彼らの担うケアの特徴から、その存在は潜在化しやすいことが示唆された。家庭内でのケア役割を担うことが彼らに過度な負担を強い、将来の可能性を狭める経験とならないように、ヤングケアラーの支援体制を社会的に構築する必要があると考えられる。

**キーワード** ヤングケアラー、若年介護者、介護者支援、家族支援、高校生、質問紙調査

## I 緒 言

家族内に、介護、精神的サポート、手伝いを必要とする者(以下、要ケア家族)がいる場合、

子どもが、家事、介護、精神的サポート、年下のきょうだいの世話、通訳など(以下、ケア)を担っていることがある。このような子どもたちを「ヤングケアラー(Young Carer)」と呼

\* 1 大阪歯科大学医療保健学部准教授 \* 2 関西学院大学総合政策学部准教授

び、その実態把握と支援の必要性を指摘する動きがある。

ヤングケアラーとは、日本ではまだ統一された定義はないが、日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト<sup>1)</sup>は「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」としている。諸外国の例をみると、例えばイギリスでは、Englandに約16万6千人のヤングケアラーが存在していることが報告され<sup>2)</sup>、彼らが抱える問題（健康面、人間関係、学業、人生設計等において問題が生じる場合がある等）やプラスの側面（生活能力の修得、自尊心、家族との絆等）が先行調査、研究で議論されている<sup>3)4)</sup>。

日本の公的統計でも、「平成24年就業構造基本調査」(総務省)<sup>5)</sup>が、家族の介護をしているかを尋ねており、公表されている統計表によると、15歳から30歳未満で家族の介護をしている者が17万7600人いることがわかる。しかし、ヤングケアラーの実態を把握するには十分とは言い難く、詳細な調査が必要とされている。このような状況の下、近年では小・中学校の教員、福祉専門職に対する質問紙調査を通して、ヤングケアラーの実態把握を試みる調査研究<sup>1)6)7)</sup>が行われており、ヤングケアラーの存在割合、ケアの状況、彼らの年齢、性別、家族構成による特徴、学校生活への影響等について論じられている。また、ヤングケアラー自身に対するインタビュー調査も行われている<sup>8)-11)</sup>。このように、日本においてもヤングケアラーに関する調査研究が着手されているものの、高校におけるヤングケアラーの実態調査はほとんど行われておらず、特に、実態把握には不可欠と考えられる、子ども自身の主訴、認識に基づく調査については未着手の状況にある。

以上を踏まえ、著者らは、高校におけるヤングケアラーの実態を、高校生自身の主訴、認識に基づいて把握することを目的として、質問紙調査を実施した。

## Ⅱ 方 法

### (1) 調査方法

2016年1～12月に、大阪府下の公立高校において、生徒を対象とした質問紙調査を実施した。13校に調査の協力を依頼し、その結果、10校の協力を得ることができた。高校の所在エリアは、北摂エリアが2校、河内エリアが3校、大阪市内が4校、泉州エリアが1校であった。また、高校偏差値ランキング<sup>12)</sup>によると、60以上が2校、50～59が2校、40～49が2校、39以下が4校であった（「普通科」の偏差値）。これらの高校の生徒6,160名が調査対象となった。そのうち、5,749名に調査票を配布することができた。調査票の配布、回収は高校に依頼した。

### (2) 調査項目

調査票は、A～Eの5項目からなる（A. 回答者の基本属性、B. 日常生活、C. 学校生活、D. 家族に対する介護、お手伝い、精神的サポート、E. ヤングケアラーに関する認識）。本研究では、主として質問Dの回答結果について述べる。表1に、その内容を示す。

なお、質問D4、D7の選択肢は、日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト<sup>1)</sup>の調査票を参考にして作成したものである。また、結果をまとめるにあたり、調査票においては高校生にもわかるように具体的な説明を付記していた箇所を、本研究では、読者が読みやすいように簡潔に表記している場合がある。一例を挙げると、調査票において、D7の選択肢の一つに、「感情面のサポート（落ち込んでいる時に話し相手になる、精神的に支える等）」があったが、本研究では、単に、「感情面のサポート」と、簡潔に表記している。

### (3) 倫理的配慮

本研究について、「関西学院大学人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の審査を受け、承認された後に、調査を開始した（受付番号：2015-36／承認年月日：2015年12月9日）。調査

の実施にあたり、各高校の校長に、調査の目的、調査の内容、プライバシーの保護等について説明し、研究への協力を求めた。調査票は回収用封筒と一緒に生徒に配布し、回答後、生徒自身が封筒へ入れ、厳封した状態で回収を依頼した。また、調査票の表紙には、調査協力は任意であること、回答したくない質問には回答する必要のないこと等、プライバシーに対する配慮を明記するとともに、配布教員にもその周知徹底を依頼した。

### Ⅲ 結 果

#### (1) 回収結果と分析対象

10校の高校から、合計で5,671票の調査票が回収された。調査への協力が得られた(白紙ではなかった)5,500票のうち、本研究の主題である質問Dに何らかの回答をしていることを条件に、分析対象を決定した。分析対象は、5,246票となった。表2に、分析対象者5,246名の学校、性別、学年を示す。なお、分析対象者の中には18歳以上の者も存在したが、本研究では、同じ高校生として、それらの者を除外することはせずに分析を行うこととした。

#### (2) ケアをしていると回答した高校生

別居している家族も含め、家族にケアを必要としている人がいるか(D1)を尋ねた結果、664名(12.7%)がいると回答していた。さらに、325名(6.2%)が、回答者自身がケアをしていると回答していた(D6)。なお、そのうち、53名は、要ケア家族(D2)で「弟・妹」のみを選択しており、かつ、要ケア家族の状態(D4)で「まだ幼いため世話が必要である」のみを選択していた。幼いきょうだいがいるという理由のみでケアをしている者をヤングケアラーとみなすかどうかについては議論のあると

表1 本研究と関わる質問Dの内容

D1: 別居している家族も含め、家族に、介護等 <sup>1)</sup> を必要としている人がいるか [はい/いいえ/わからない] ※「はい」のみD2へ。
D2: D1で答えた介護等を要する人は誰か(要ケア家族)[祖父/祖母/父/母/兄/姉/弟/妹/その他] ※複数回答可。兄・姉、弟・妹については人数も尋ねている。
D3: 要ケア家族と一緒に住んでいるか [はい/いいえ]
D4: 要ケア家族の状態 [病気である/認知症がある/身体障がい(目や耳の障がいも含む)、または、身体的な機能の低下がある/精神疾患や精神障がいがある、または、精神的に不安定である/知的障がいがある/まだ幼いため世話が必要である/日本語が苦手である(外国の出身である等の理由で)/その他/わからない] ※複数回答可
D6: 要ケア家族のために回答者が介護等をしているか [している/していない] ※「している」のみD7へ
D7: 回答者がしている要ケア家族のための介護等の内容 [家事(料理・掃除・洗濯・買い物等)/お金の支払い(ガス・電気・水道代、家賃等の支払い等)/書類の確認や対応(学校や市役所等からの書類を読み、返信する等)/外出するときの介助・付き添い/身体的な介助(トイレ、入浴、食事の介助、体をふく等)/通訳(手話で通訳する、日本語で通訳する等)/医療的な世話(たんの吸引、薬を飲む手伝い等)/感情面のサポート(落ち込んでいる時に話し相手になる、精神的に支える等)/力仕事をする(重い物を運ぶ等)/病院や施設へのお見舞い/年下のきょうだい(弟または妹)の世話/その他] ※複数回答可
D9: D7で答えた介護等をしている期間 ※「( )年( )か月位」としてカッコ内に数字を記入。
D10: D7で答えた介護等をしている頻度 [毎日/週に4、5日/週に2、3日/週に1日/1か月に数日/1年に数日/その他]
D11: D7で答えた介護等をしている時間(1日あたり)(学校がある日、ない日それぞれ) [8時間以上/6時間以上8時間未満/4時間以上6時間未満/2時間以上4時間未満/1時間以上2時間未満/1時間未満/その他]

注 質問文は、適宜、要約している。〔 〕内は選択肢を示している。  
1) 調査票では「介護、お手伝い、精神的サポート」としているが、表中ではすべて「介護等」と略す。

表2 分析対象者の学校、性別、学年

(単位:上段 名, 下段 %)

	総数	性別			学年		
		男性	女性	不明	1年	2年	3年
総数	5 246	2 199 41.9	3 020 57.6	27 0.5	1 760 33.5	1 893 36.1	1 593 30.4
高校A	840	400 47.6	433 51.5	7 0.8	279 33.2	289 34.4	272 32.4
B <sup>1)</sup>	187	84 44.9	101 54.0	2 1.1	85 45.5	102 54.5	-
C <sup>2)</sup>	45	27 60.0	18 40.0	-	18 40.0	27 60.0	-
D	1 018	428 42.0	585 57.5	5 0.5	343 33.7	334 32.8	341 33.5
E <sup>3)</sup>	291	107 36.8	181 62.2	3 1.0	-	162 55.7	129 44.3
F	443	182 41.1	259 58.5	2 0.5	167 37.7	147 33.2	129 29.1
G	533	220 41.3	311 58.3	2 0.4	191 35.8	179 33.6	163 30.6
H	799	299 37.4	498 62.3	2 0.3	292 36.5	290 36.3	217 27.2
I	1 037	436 42.0	597 57.6	4 0.4	385 37.1	334 32.2	318 30.7
J <sup>4)</sup>	53	16 30.2	37 69.8	-	-	29 54.7	24 45.3

注 1) 1. 2年生のみを対象に実施 2) 1つの部活動のみを対象に実施  
3) 2. 3年生のみを対象に実施 4) 2. 3年生の各1クラスを対象に実施

ころであるが、本研究では、これら53名はこの時点で除外し、残りの272名を対象に結果をまとめた。

(3) 高校生の実施しているケアの状況

1) 要ケア家族とその状態

272名のうち、270名が要ケア家族(D2)を回答していた。集計結果は、「祖母」が最も多

かった(表3)。なお、要ケア家族(D2)について、1項目のみを選択した者が208名、2項目を選択した者が50名、3項目を選択した者が8名、4項目を選択した者が4名であった。また、要ケア家族との同居(D3)については265名が回答しており、そのうち要ケア家族全員と同居している者は150名であった。要ケア家族の状態(D4)については、身体障がい・身体的機能の低下が最も多かった(表3)。

要ケア家族(D2)の回答ごとに、その状態(D4)について集計した(表4)。なお、要ケア家族(D2)において複数の項目が回答されている場合には、誰の状態か判断が難しいため、1項目のみを回答していた208名について分析した。その結果、要ケア家族が「祖父」のみ、あるいは、「祖母」のみの場合には、病気、身体障がい・身体的機能の低下、認知症の3項目が多く回答されていた。要ケア家族が「父」のみの場合、病気が突出して多く、「母」のみの場合、病気が最も多く、次いで精神疾患・精神障がい・精神的不安定が多かった。要ケア家族が「兄・姉」のみ、「弟・妹」のみの場合、知的障がい、身体障がい・身体的機能の低下が多かった。

2) ケアの内容

272名のうち、ケアの内容(D7)については、265名が回答しており、家事が最も多かった

表3 高校生の実施しているケアの状況

(単位 名)

	祖父	祖母	父	母	兄・姉	弟・妹	その他
要ケア家族 (n=270)	61	129	27	55	16	43	17
要ケア家族の状態 (n=261)	病気	認知症	身体障がい・身体的機能の低下	精神疾患・精神障がい・精神的不安定	知的障がい		
	87	40	109	32	32		
	まだ幼いため世話が必要	日本語が苦手	その他	わからない			
	20	11	12	18			
ケアの内容 (n=265)	家事	お金の支払い	書類の確認や対応	外出時の介助・付き添い	身体的な介助	通訳	
	115	10	29	92	48	15	
	医療的な世話	感情面のサポート	力仕事	病院や施設へのお見舞い	年下のきょうだいの世話	その他	
	13	74	106	64	44	6	

注 複数回答あり。

表4 要ケア家族とその状態

(単位上段 名, 下段 %)

	病気	認知症	身体障がい・身体的機能の低下	精神疾患・精神障がい・精神的不安定	知的障がい	まだ幼いため世話が必要	日本語が苦手	その他	わからない
総数 (n=199)	67	29	78	21	24	8	5	7	13
祖父 (n=27)	33.7	14.6	39.2	10.6	12.1	4.0	2.5	3.5	6.5
祖母 (n=86)	44.4	18.5	44.4	7.4	-	-	-	-	7.4
父 (n=12)	28	22	37	5	3	-	-	3	9
母 (n=34)	32.6	25.6	43.0	5.8	3.5	-	-	3.5	10.5
兄・姉 (n=8)	11	-	5	-	-	-	-	-	-
弟・妹 (n=22)	91.7	-	41.7	-	-	-	-	-	-
その他 (n=10)	13	1	6	8	-	-	5	2	1
総数	38.2	2.9	17.6	23.5	-	-	14.7	5.9	2.9
祖父	-	-	4	1	5	-	-	-	-
祖母	-	-	50.0	12.5	62.5	-	-	-	-
父	2	-	10	4	14	5	-	2	1
母	9.1	-	45.5	18.2	63.6	22.7	-	9.1	4.5
兄・姉	1	1	4	1	2	3	-	-	-
弟・妹	10.0	10.0	40.0	10.0	20.0	30.0	-	-	-

注 要ケア家族の状態に「無回答」であった9名は分析から除外した。複数回答あり。

(表3)。また、要ケア家族(D2)の回答ごとに、ケアの内容(D7)について集計した(表5)。ここでも、要ケア家族(D2)において複数の項目が回答されている場合には、誰に対するケアか判断が難しいため、1項目のみを回答していた208名について分析した。

表5 要ケア家族とケアの内容

(単位: 上段 名, 下段 %)

	家事	お金の支払い	書類の確認や対応	外出時の介助・付き添い	身体的な介助	通訳	医療的な世話	感情面のサポート	力仕事	病院や施設へのお見舞い	年下のきょうだいの世話	その他
総数 (n=203)	85 41.9	7 3.4	22 10.8	66 32.5	38 18.7	6 3.0	10 4.9	52 25.6	78 38.4	48 23.6	25 12.3	3 1.5
祖父 (n=29)	9 31.0	-	2 6.9	9 31.0	5 17.2	1 3.4	1 3.4	8 27.6	8 27.6	9 31.0	-	-
祖母 (n=90)	32 35.6	3 3.3	9 10.0	29 32.2	16 17.8	1 1.1	5 5.6	16 17.8	42 46.7	29 32.2	1 1.1	1 1.1
父 (n=12)	9 75.0	-	1 8.3	5 41.7	3 25.0	1 8.3	-	2 16.7	4 33.3	2 16.7	-	-
母 (n=33)	25 75.8	4 12.1	7 21.2	6 18.2	3 9.1	3 9.1	2 6.1	10 30.3	15 45.5	3 9.1	5 15.2	1 3.0
兄・姉 (n=8)	2 25.0	-	1 12.5	4 50.0	2 25.0	-	-	4 50.0	3 37.5	-	-	1 12.5
弟・妹 (n=22)	7 31.8	-	2 9.1	10 45.5	8 36.4	-	2 9.1	10 45.5	6 27.3	3 13.6	18 81.8	-
その他 (n=9)	1 11.1	-	-	3 33.3	1 11.1	-	-	2 22.2	-	2 22.2	1 11.1	-

注 ケアの内容に「無回答」であった5名は分析から除外した。複数回答あり。

表6 ケアの頻度、時間

	人数	%	学校がある日		学校がない日	
			人数	%	人数	%
ケアの頻度						
総数	272	100.0				
毎日	91	33.5				
週に4, 5日	32	11.8				
週に2, 3日	38	14.0				
週に1日	19	7.0				
1か月に数日	50	18.4				
1年に数日	12	4.4				
その他	9	3.3				
不明(無回答など)	21	7.7				
1日のケア時間						
総数	272	100.0	272	100.0	272	100.0
8時間以上	14	5.1	14	5.1	31	11.4
6時間以上8時間未満	9	3.3	9	3.3	17	6.3
4時間以上6時間未満	16	5.9	16	5.9	14	5.1
2時間以上4時間未満	22	8.1	22	8.1	43	15.8
1時間以上2時間未満	41	15.1	41	15.1	48	17.6
1時間未満	111	40.8	111	40.8	74	27.2
その他	23	8.5	23	8.5	18	6.6
不明(無回答など)	36	13.2	36	13.2	27	9.9

要ケア家族が「祖父」のみの場合、家事、外出時の介助・付き添い、病院や施設へのお見舞いが、「祖母」のみの場合、力仕事が多く回答されていた。要ケア家族が「父」のみ、および「母」のみの場合、家事が多くあった。要ケア家族が「兄・姉」のみの場合、外出時の介助・付き添い、感情面のサポートが、「弟・妹」のみの場合、年下のきょうだいの世話が最も多かった。

3) ケアの期間、頻度、時間

272名のうち、198名がケアの期間(D9)について、年月を回答していた。25パーセントイル(期間が短い方から4分の1にあたる者のケア期間)は1年1カ月、中央値(期間が短い方から4分の2にあたる者のケア期間)は3年0カ月、75パーセントイル(期間が短い方から4分の3にあたる者のケア期間)は6年5カ月であった。なお、最大値は17年11カ月(生まれて

からずっとという主旨の回答)であった。ケアの頻度(D10)は「毎日」が最も多く、1日のケアの時間(D11)は、学校がある日、学校がない日ともに、「1時間未満」が最も多かった(表6)。しかし、2時間以上と回答した者が、学校がある日では61名(22.4%)、学校がない日では105名(38.6%)いた。さらに、学校がない日では4時間以上と回答した者が62名(22.8%)となっていた。

4) 高校生に占めるヤングケアラーの割合

どの程度のケアを担う者をヤングケアラーとみなすかどうかについては明確な定義がないため、ここではケアの頻度(D10)およびケアの時間(D11)から、高校生が担っているケアについて、次の5つの判断基準を設定し、それぞれの判断基準に該当する者の数を求めるとともに、本調査の分析対象者5,246名に対する割合を求めたところ、イ) ケアをしていると答えた

者は272名(5.2%)、ロ)週4、5日以上ケアをしている者は123名(2.3%)、ハ)学校がある日に1日2時間以上のケアをしている者は61名(1.2%)、ニ)学校がない日に1日4時間以上のケアをしている者は62名(1.2%)、ホ)学校がある日に1日2時間以上、かつ、学校がない日に1日4時間以上のケアをしている者は50名(1.0%)となった。

## Ⅳ 考 察

本調査は、高校生に回答を求めたものであるため、本研究では、高校生自身の主訴、認識により、ヤングケアラーの割合とケアの状況を把握することができた。

### (1) ヤングケアラーの割合・人数について

Ⅲ(3)4)で設定した判断基準では、イ)が、家族のケアをしている高校生、すなわちヤングケアラーを最も広くとらえているといえるが、その割合は約5%であった。「平成28年度学校基本調査」<sup>13)</sup>によると、大阪府の高校(国公立・私立、全日制・定時制を含む)の在籍生徒数は23万5580人である。この23万5580人について、本調査と同様、5%が家族のケアをしていると仮定すると、大阪府では約1万人の高校生が家族のケアをしていることになる。また、判断基準のホ)「学校がある日に1日2時間以上、かつ、学校がない日に1日4時間以上のケアをしている者」に該当する高校生は、家族のケアをしている高校生の中でも、ケアをしている時間が比較的長く、その意味で負担が大きい状況に置かれていると考えられる。本調査と同様、1%がホ)と同等のケアを担っていると仮定すると、大阪府の高校生の中にはそのような者が約2,000人存在することになる。こうした状況を踏まえると、日本全体(高校の在籍生徒数は330万9342人<sup>13)</sup>)で考えた場合には、都道府県によって割合に差があるとしても、かなりの数のヤングケアラーが存在すると考えられる。以上のことから、ヤングケアラーは、日本においても看過できない規模で存在しているといえる。

また、本調査で得られた5.2%という割合は、北山ら<sup>6)</sup>が中学校教員の認識に基づいて示した1.2%という割合を上回っていた。この1.2%という数値は、負担が大きい状況に置かれていると推測されるケースの割合と近かった。ただし、北山ら<sup>6)</sup>の調査は、本研究とは校種が異なる(高等学校と中学校)。さらに、家庭内役割のために学校生活上に問題が生じている生徒の数に基づいて割合を算出しており、そこには本研究では除外した幼いきょうだいがいるという理由のみでケアを担っている生徒も含まれている等の違いがある。そのため単純に比較することは難しいが、教員は、ある程度、負担が大きい状況にあるヤングケアラーを中心に認識していると考えられ、負担が比較的小さい状況にあるヤングケアラーは潜在化しやすい可能性があると考えられる。現在は負担が小さい状況であっても、要ケア家族の状態や家族形態の変化等により、重度化していくケースもあると考えられる。負担が小さく、軽度の時点で、その存在に気付くことが重要である。

### (2) 要ケア家族の状況について

Ⅲ(3)からは、家族のケアをしている高校生の家庭における要ケア家族について、祖母が突出して多いことが示された。高齢社会において、このような高齢者介護に関わるケースが多いことは必然の結果ともいえよう。ただし、先行研究では、ヤングケアラーのケアの対象には、母、きょうだいが多いという結果が示されており<sup>1)</sup>、この結果のみに着目すると、ヤングケアラーが抱える問題は、高齢者介護の領域とは、あまり関係がないようにも見える。しかし、本研究の結果からは、実際の高校生がケアをするようになった背景には、高齢者介護の問題が存在することが少なくないと考えられる。高齢者の介護ニーズ発生に伴う家庭内でのケア役割の負担が、大人のみならず、子どもにまで及んでいることを認識する必要がある。

また、障がいや有するきょうだいの世話や、何らかの疾患や障がいを抱えた親のサポートをしているケース等、ケアを要する親やきょうだ

いがあるケースも確認された。ケアを要する家族が親の場合、子どもによるケアが常態化する可能性を指摘する先行研究もあり<sup>9)</sup>、このようなケースも注意を要すると考えられる。

### (3) ケアの期間について

本調査結果では、ケアの期間の中央値が3年0カ月であったことから、半数以上が高校生になる前からケアを担っていることが示唆された。すなわち、15歳未満のヤングケアラーの存在が、高校生自身の回答からも確認された。特に、約4分の1の者のケア期間が6年を越えていたことは、ケア役割が常態化、長期化しつつあるケースが一定数存在することを示唆するものと考えられる。子どもがケアを担うことにはプラスの側面もあるが<sup>4)</sup>、中学生、高校生という重要な時期を、ケア役割に費やすことの将来的な影響にかんがみると、彼らに対する早い段階でのサポートの必要性が指摘できよう。

### (4) ケアの頻度・時間・内容について

家族のケアをしている高校生の約33%が、毎日のようにケアに携わっていた。学校のある日に2時間以上ケアをしている者が約22%、学校がない日に4時間以上ケアをしている者が約23%みられた。このようなケースは、高校生が担うケアとしては負担が大きいと推測され、他の生活面への影響が懸念される。長時間をケアに費やした場合、イギリスの先行調査<sup>4)</sup>が示すようなヤングケアラーの負の側面、すなわち学校外での勉強(塾、宿題等)、友人づきあい、部活動、余暇活動を十分に行えない、身体的・精神的負荷が大きい等の状況に置かれるリスクが高くなると考えられる。

ケアの内容からもいくつかの示唆が得られた。まず、要ケア家族が祖父、祖母、父、母の場合には、共通して家事が多く挙げられており、家庭内の大人(特に父母)がケアを要する場合、家事を子どもが担いやすいと考えられる。

また、高校生のヤングケアラーは、身体的ケア以外のケアや特定の場面におけるケアを担う傾向があることも示唆された。すなわち、身体

的な介助を担っていると回答した者は比較的少なく、それ以上に、家事、力仕事、外出時の介助・付き添いが挙げられていた。また、感情面のサポートは、特に要ケア家族が母、兄・姉、弟・妹である場合に多くみられたが、要ケア家族が祖父、祖母、父の場合でも挙げられていた。年下のきょうだいの世話は、当然ながら要ケア家族が弟・妹の場合に最も多かったが、母がケアを要する場合でも挙げられていた。これらを概観すると、高校生は、ケアを要する家族に、直接、身体的なケアを行う場合もあるが、親の代わりに、または副介護者として、家事を担う、年下のきょうだいの世話をし、感情面でのサポートをする、特定の場面で力仕事や外出時の介助・付き添いをする、というケア役割が回ってきやすいという特徴があると考えられる。ただし、要ケア家族が母の場合については、子どもが主介護者として、感情面のサポートを行っているケースが少なからずあると考えられる。

以上のような高校生のケア役割の特徴が、彼らがヤングケアラーであることを外部から見えにくくしていると考えられる。たとえ医療、保健、福祉の専門職がその家庭に関わっていても、上記のように、直接的な身体的ケアを担っていない場合や場面限定のケアを担っている場合、子どもあるいは孫がケアを担っていることを見逃しやすいことが推測できる。ヤングケアラーの存在に気付くためには、家庭内において玉突きのように回ってきた、家事、年下のきょうだいの世話等のケア、感情面のサポート、場面限定のケアについて、誰がどの程度担っているか、医療、保健、福祉の専門職、学校の教員が注意を払っていく必要があると言えよう。

## V 結 語

本研究では、高校におけるヤングケアラーの実態把握を試みた。確実に高校にもヤングケアラーは存在し、負担が大きいケースもそこには含まれていることが示された。また、彼らの担うケアの特徴から、その存在は潜在化しやすいことが示唆された。家庭内でのケア役割を担う

ことが彼らに過度な負担を強い、将来の可能性を狭める経験とならないように、高校において、またはそれ以前の早い段階で、軽度なケースも含め、周りの大人、専門職、教員が注意を払い、ヤングケアラーの支援体制を社会的に構築する必要があると考えられる。

なお、本調査は無作為抽出に基づいていない。しかし、大阪府の様々な地域・高校において実施していること、調査票の配布数に対して回答数（白紙ではなかった回答数）の占める割合が高かったことにかんがみると、大阪府の高校におけるヤングケアラーの実態について、ある程度信頼できる結果を示すことができたと考えられる。今後は、高校生が担うケアの実態と、日常生活や学校生活の状況との関連について、分析を行う予定である。

## 謝辞

ご多忙のところ、テーマの重要性に賛同し、ご協力くださった高校の校長、教頭、先生方、そして、ていねいに回答してくださった高校生の皆さんに心より御礼申し上げます。なお、本稿は、科学研究費補助金（課題番号：17K04256）を得て行っている調査研究の成果の一部である。

## 文 献

- 1) 日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクト、南魚沼市ケアを担う子ども（ヤングケアラー）についての調査《教員調査》報告書、日本ケアラー連盟 2015.
- 2) Office for National Statistics. 2011 Census (<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160107224205/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census-analysis/provision-of-unpaid-care-in-england-and-wales--2011/sty-unpaid-care.html>) 2017.7.4.
- 3) Dearden, C. and Becker, S. Young carers in the UK : 2004 Report. London : Carers UK 2004.
- 4) Young Carers Research Group, Loughborough University. The lives of young carers in England Qualitative report to DfE 2016. Department for Education 2016.
- 5) 総務省. 平成24年就業構造基本調査. (<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2012/index2.htm#kekka>) 2017.7.1.
- 6) 北山沙和子, 石倉健二. ヤングケアラーについての実態調査－過剰な家庭内役割を担う中学生－. 兵庫教育大学学校教育学研究 2015 ; 27 : 25-9.
- 7) 澁谷智子. ヤングケアラーに対する医療福祉専門職の認識. 社会福祉学 2014 ; 54(4) : 70-81.
- 8) 森田久美子. メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験. 立正社会福祉研究 2010 ; 12(1), 1-10.
- 9) 土屋葉. 「障害」の傍らで－ALS患者を親に持つ子どもの経験. 障害学研究 2006 ; 2 : 99-123.
- 10) 澁谷智子. 子どもがケアを担うとき：ヤングケアラーになった人／ならなかった人の語りと理論的考察. 理論と動態 2012 ; (5) : 2-23.
- 11) 澁谷智子. 高校生のヤングケアラー. ねぞす 2014 ; 54 : 58-64.
- 12) 高校偏差値. net (<http://高校偏差値.net/osaka.php>) 2017.5.25.
- 13) 文部科学省. 平成28年度学校基本調査調査結果の概要（高等教育機関）. ([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035_3.pdf)) 2017.5.30.